



TITLE:

台湾におけるエル・トール・パラ  
コレラの流行に関する研究(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

許, 子秋

---

CITATION:

許, 子秋. 台湾におけるエル・トール・パラコレラの流行に関する研究.  
京都大学, 1963, 医学博士

ISSUE DATE:

1963-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211078>

RIGHT:

氏 名	許 子 秋 きよ し しゅう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 84 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	台湾におけるエル・トール・パラコレラの流行に関する研究

(主 査)  
論文調査委員 教授 近藤鋭矢 教授 荒木千里 教授 木村忠司

### 論 文 内 容 の 要 旨

台湾において昭和37年7月エル・トール・ビブリオによるパラ・コレラの流行があり、細菌検査による確定症例383名、疑似症例817名について、その疫学的、臨床学的、歴史的な分野から分析を加えた。

流行は台湾南部の西沿海地方の農漁村に始まり、南部に広く伝播したが8～9週で終息した。その間台中・台北にも少数の発生をみたが全島の拡大はなく、全般的に散発的なパターンを示した。流行期間は最初の発症例と最後の発症例との間に57日を経過したが平均19.5日であり、死亡率は確定例で6.26%、疑似例で1.74%、入院死亡率は3.07%できわめて低く、全症例の93.5%が早期かつ強制的に入院の上、適切な治療をうけたためと考えられる。罹患率は55才以上の高令者に高く、4才以下の小児には少ない。死亡率は高令者に高く、9才以下の小児がこれに次いでいる。

職業的な差異はないが、農業従事者に多く、低収入の下層階級に多いように思われた。予防注射の状態と罹患との関係では、予防注射を流行前にうけたものが、すくなかったため判然としないが、罹患者の3.6%が充分量のワクチン注射をうけ、その中で免疫発生に必要な時間を経過していたものは1.3%であった。

菌の排出期間は患者で平均4.8日、健康保菌者では平均2.6日である。

水道設備と流行との関係については有意の差が認められないが、水道設備のない所に患者の発生が多いように思われた。

伝播経路に関して、流行地の飲用水および糞の細菌検査ではすべて陰性であり、接触感染について保菌者率は同居家族で3.44%～5.11%であり、全住民の検査では0.27%であり、接触感染が重要な意味をもっていたと考えられた。流行期間における気象学的因子と流行との間には関係を認めなかった。

臨床的にみると、パラコレラの初発症状のうち、下痢を軽症・中等症・重症に分けた場合おのおのはほぼ1/3宛であり、同時に嘔吐を訴えた者は85%を占めており、コレラのアチドーシスによると考えられる嘔吐が、パラ・コレラでも高率に認められ、臨床的な差異が少ないことを示している。発病当日の症状で意

識障害または重篤な一般状態を示したものは16.6%を占め、脱水症状も血漿比重測定値で1.036を越えた者が39.0%を占めている。

死亡率は3.09% (24名) であるが、半数の12名は発病当日の死亡であり、21名は発病3日以内に死亡している。

治療期間はほぼ2週間を要するが、発病より全快退院までに要する期間は平均16日である。

コレラの治療には水分補給が第一であり、原則として生理的食塩水の静脈内注射を行なうが、アチドージスの回復に重曹水の補給が必要である。入院中使用した生理的食塩水の量は平均入院当日1人当り3,756 cc であり、入院期間中の全使用量は1人当り平均7,675cc である。

全経過中 20,000cc 以上の静注を必要とした症例が7例も認められたことは驚嘆に値する。

歴史的に台湾に発生したコレラの沿革をみるに1820年に始まって以来数十回にのぼる発生が認められるが、すべて常に外部よりの侵入によるもので、コレラは台湾における地方病ではないことを示している。コレラの侵入は主として大陸の対岸または日本内地からのものであり、その侵入頻度に比して全島的に大流行を起こした経験は少ない。

春から秋にかけて侵入した場合には、流行を起こし得るが、冬に侵入したものは流行したことがない。

### 論文審査の結果の要旨

台湾において昭和37年7月エル・トール・パラコレラの流行があり、細菌検査による確定症例383名、疑似症例817名について、疫学的、臨床学的、歴史的な見地から分析検討をくわえた。

このエル・トール・パラコレラの流行は疫学的観点から見ると真正コレラと一元的なものであったが、過去のコレラ流行にくらべて今回の発生は散発的、分散的な特徴を呈し、死亡率も治療の進歩により過去のコレラに比しはるかに低かった。流行は過去のコレラと同じく、海岸地方の環境衛生的に落伍した地方に著しく、保菌者率はコレラに比して高く保菌期間も長かった。

患者326名の臨床的観察の結果はエル・トール・パラコレラが真正コレラと臨床的に区別できないという一般の意見と一致している。したがって真正コレラの治療と同様、統一的に実施された台湾での治療成績は死亡率を約3%にまで低下せしめた。パラコレラの防疫対策の一つとして生理的食塩水の大量と重曹水の準備が必要である。

今世紀に入ってから21回におよぶ台湾でのコレラ流行は、常に外部からの侵入によるものであり、侵入頻度に比して、全島的に大流行を起こした経験は少ない。

このように本研究は学術上有益であり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。